

2023. 4. 23. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書 20章 9～19節
『隅の親石』

本日の箇所は「ぶどう園と農夫のとえ」という小標題が掲げられています。ぶどう園の主は神。農夫たちはイスラエル。僕は預言者たち。息子はイエスを表すという寓話仕立てで描き初められます。

ルカはこのたとえ話をマルコ 12;1-12 から引用しつつ、その特徴である歴史的出来事を救いの歴史の中に取り込んでいこうとします。すなわち 18 節の「その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう」という神の裁きの警告を付け加えて、70 年に起こったエルサレム滅亡を予告するという文体に整えあげてゆきます。つまり、ルカが福音書を記したのは 70 年代半ば位ですから、すでに起こってしまった歴史の出来事を、それ以前の時代に還ってその出来事を予告したというふうに組み上げてゆくのです。この方法は 15 節の「息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった」(マルコ版は先に殺して屍を外にほうり出す)というイエスのエルサレム城壁外で殺されたことの暗示をよりリアルに歴史の中に取り込むための伏線として用いているです。

さらに、このたとえはイエスが「民衆」(9)に向かって話されたという形を踏襲しながら、実は「律法学者たちや祭司長たち」への「当てつけ」(19)として語られたとルカは結んでいます。要するに「あなたたちは救いの歴史の中から一体何を学んだのか」という厳格な問いを律法学者や祭司長に発するのです。この問いはもちろんルカ自身、つまり初代教会内部において何度も自らに対して投げかけられた同じ問いでもあったのです。

ここでは「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」(17)という詩編 118 篇 32 節を引き合いに出して彼我に問いかける作業が行われます。すなわち「あなたたち、そしてわたしたちは主たる親石に固執する。それゆえ、救いの歴史を読み解くことがかなわない。イエスは捨てられた石を親石とすることにその答え、福音の質があると宣言された」と語るのです。歴史理解の転

換、それはとりもなおさず人間理解、そして自己理解の転換でもあったのです。

わたしたちも自分を変えて行く、改めて行くという問いの前に晒されることが人生の中には望む望まないにかかわらず幾度もあるものです。そのことがどれだけ痛みや苦しみを伴うものであったとしてもです。

神を信じるとは、自己変革を迫られることですから、言い換えればそれに伴う痛みや苦しみを自分の身に招くということです。ですから、信仰とは痛みや苦しみをもってその生けるしるしとし、また証しをたてるものでもあるのです。

自分を改めようとする痛みや苦しみを伴わない信仰、これを偶像崇拝というのです。主たる親石、つまり権力や慣習、利害や自己中心しか認めない律法学者や祭司長と同じなのです。そのような偶像崇拝とは、単に偶像を拝むということではなく、自分が問われる痛みや苦しみを避けつつ信じようとする自己執着のことなのです。

捨てられた役に立たないつまらない石、つまり福音を自らの親石とするためには痛みや苦しみに身をひたすということなのです。